

第一節 古墳時代

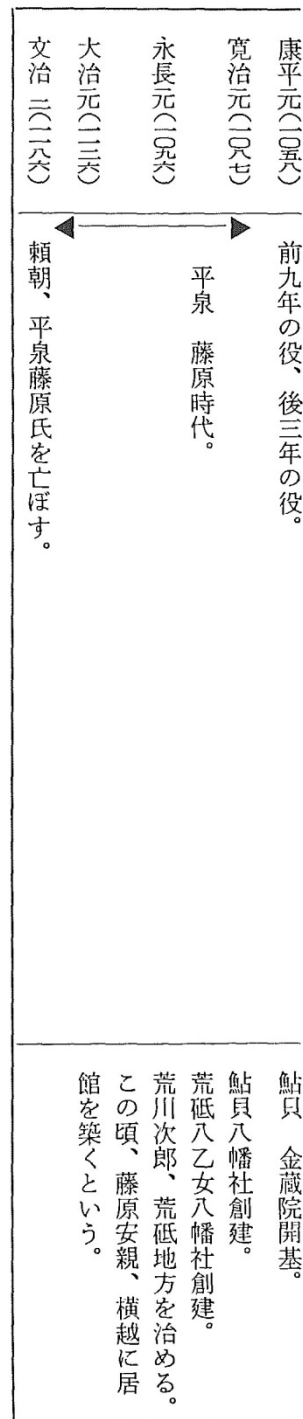
1 東北の古墳

日本の古代史とえば直ぐ脳裏に浮かぶものの一つに、幾内方面に数多く、周囲に水をたたえその中が小高い山になった松林のある雄大な前方後円墳の天皇陵がある。

第1表 古代略年表

年 代	陸奥国・出羽国	白鷹町
大化(五)六(六)	この頃置賜、最上を含む陸奥国成立。	<p>白鷹寺観音像(飛鳥ノ奈良前期)。</p> <p>置賜の古墳時代</p> <p>白鷹虚空蔵開山。</p> <p>⑤ 称名寺行基の開基。</p> <p>⑥ 菅蒲薬師如来像(行基の作)。</p> <p>⑦ 鮎貝向福寺建立。</p> <p>⑧ 杉沢観音堂建立 (正観音像行基作)。</p> <p>⑨ 杉沢観音堂罫口記銘。</p>
和銅(五)七(三)	出羽国設置。置賜、最上の二郡を陸奥国より割いて出羽国に入れる。	
和銅(七)七(四)	出羽国に養蚕を令す。	
霊龜(三)七(六)	尾張、上野、信濃、越後の人民を出羽国に移す。	
養老(三)七(九)	信濃、上野、越前、越後の百姓各百戸を出羽国に移住。	
天平(八)七(庚)	陸奥国に按察使を置き、養老五年より出羽国をも総監する。	
宝龜(二)七(〇)	陸奥の国府多賀城に移る(天平初)。	
大同(二)八(〇七)	出羽国府莊内に退く(城輪の柵)。	
元慶(二)八(七)	⑩ 高房宮。	
承和(五)八(元)	⑪ 龜岡文殊堂。	
延長(五)九(七)	元慶の乱。出羽の夷俘乗く。	
天曆(四)九(五)	⑫ 安久津阿弥陀堂。	
	延喜式成り、出羽国を十一郡に分ける。置賜をオヒタムと訓す。	
	和名類聚抄を編し置賜を「於伊太三」と書き置賜、広瀬、屋代、赤井、宮城、長井、余戸の七郷に分つ。	

⑩は伝承の意



昭和四十七年奈良県明日香で、わが国最初の極彩色壁画古墳が発見され、古代史に新しい一ページを加えたのである。それは、万葉のふるさと奈良県高市郡明日香村の高松塚古墳で、極彩色の男女像や星座、玄武などが描かれ、古代史の究明に貴重な存在となったのである。この高松塚古墳は、飛鳥時代の貴族クラスの墳墓地と見られている。又、この年マスコミを賑わしたものに、今から二一〇〇年前のものと思われる中国の長沙馬王堆古墳の発掘がある。古墳からは生々しい弾力のある肉体の死者が取り出され、布帛、木俑、楽器など千点を越す副葬品が出土し世界中をアツといわせ、その当時の中国の文化水準の高さを知らせたのである。

わが国の古墳は古代国家成立とのかかわりあいの中で畿内、九州方面で早くから築造され、殊に畿内の古墳はその規模、数、内容において日本古代史の主要部分を満たしている。古墳は遅くとも三世紀末か四世紀はじめには出現したものであり、古墳に葬られた人は相当な権力者でその土地の族長の墳墓であり、又族長中の族長である天皇の墳墓であった。したがって古墳は、支配体系と直接関係するものである。

東北地方にも数多くの古墳があり、当県内にも高畠・赤湯方面、山形・東根方面、庄内地方に在る。氏族の長(豪族)或は中央から派遣された行政官などを葬ったものが古墳で、文献のない時期の歴史を明らかにする上で

最も秀れた資料となる。東北地方の古墳は四〇五世紀ころには出現したと見られており、最終的には八世紀ころまで存在する。大墳墓形式は大化改新（六四五）の薄葬令によって縮小されたにもかかわらず、東北に於いてはその後も造られている。又、東北地方の古墳は、岩手県南部と山形県中部を北限として存在が認められている。東北最古の古墳は会津若松市の大塚山古墳であって、畿内の色彩の濃い前期古墳と称されていて、前方後円墳の特徴を示し四世紀後半ごろのものと推定されており、墳墓の内部構造・副葬品等から、この被葬者は会津地方の豪族首長であると解される。尚、出土品中の三角縁唐草文帯二神二獣鏡は、畿内政権と密接な政治的関係を有するものではないかと見られている。この時期の土師器が宮城・山形両県からも出土しているところから、この地方にも同様の文化があったものであろう。

五世紀から六世紀にかけての中期古墳の時期は、古墳文化の最盛期で、宮城・福島・山形の各県に見られる。前方後円墳の主軸が一六メートルもある大きなものもあり、五〇メートル前後の円墳等も含め数多くの古墳が確認されている。

六世紀後半ごろから後期古墳の時期に入るが、一般的特徴として横穴式石室をもつ古墳が造られ、中期以来の箱式石棺や竪穴式石室も併行して造られている。後期古墳の特色の一つに群集墳があり、一〇〇基、二〇〇基の大群がみられる（福島県真野古墳群、宮城県上郷古墳群）。このような群集墳の発生は、古墳を造れるものがこれまでのように政治権力と富力とを有した強力な首長のみでなく、中小豪族層が出現し、新たに古墳を造れる能力に至ったことを示すものであろう。群集墳は福島県地方に早く現われ、北進するに従って遅れ、東北の北部地方で始まるのは七世紀後半から八世紀初めの頃と云われている。またこの群集墳の中に族長（有力な豪族層）墓ではないかとみられるものがあり、あるいはこの頃になってその族長たちが、国県制の中に編入されるような変化

があつたのではないかとも考えられ、中には、調査の結果「先代旧事本紀」に記された国造の北限とからみあう現象が見られ、古墳後期になって、阿武隈川以南の地が、中央の政権下にくみ入れられたものではないかとされている〔豊田武「東北の歴史」〕。

七世紀後半に入ると、高塚群集墳に代って凝灰岩質を利用した横穴古墳が造られる。斬かる陸奥、出羽の古墳北進の形は、奈良朝に入ってから文献上出羽の蝦夷征伐に関する記事が多いのに、陸奥の記事は鎮撫程度であることに限りあつていよう思える。

古墳を造った豪族は全国的にみれば弥生時代に遡るが、弥生時代を前・中・後の各期に分けた場合、前期の弥生式土器出土は東海地方から西であり、中部・関東・東北の各地方の出土土器はすでに中期及び後期であり、東北地方にとって弥生時代前期とは縄文時代晩期であつたことを意味する〔前掲書〕。したがって古墳造成の時代もこれと同様のことが言える。

2 山形県内の古墳

一 県内

県内の古墳は、置賜盆地では梨郷、赤湯、高島、和田方面の山腹、山麓と一部平地に見られる。村山盆地では上山、山形、東根の各地域に存在し、鶴岡方面が北限とされている。

弥生式土器を用いて生活した時代に続いて、族長墓を築いたといわれる所謂古墳時代に移る。

この頃の東北地方には農耕がなかつたとされてきたが、考古学的な研究が進むにつれて、弥生時代以降は水稻耕作の存在が立証（置賜盆地では八幡原遺跡など）されるようになった。

県内の古墳の年代観について、いわゆる置賜型と村山型で造営年代に差があるのではないかといわれている。西村真次氏が、大まかに村山型は置賜型より新らしいとした〔置賜盆地の古代文化〕のに対し、柏倉亮吉氏は反対に村山型は置賜型より古いとした〔山形県の古墳〕。その後川崎利夫氏は、県内に分布する古墳は古墳時代の前・中期に属するものはなくすべてが後期のもので、しかもその終末期のものである〔「辺境における古墳文化の特質」『日本考古学の諸問題』所収〕としている。また加藤稔氏は、山形盆地の古墳は造営が中央と大差なく終っており、米沢盆地では奈良時代にいたっても末期古墳の造営があった〔「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』所収〕としており、現在までの研究では、置賜型は村山型より新らしいとするのが大勢のようである。

置賜の古墳

置賜の古墳といっても、梨郷、宮内、赤湯、高島、上郷、和田方面に限られて築造されていて、今のところこの地域以外には発見されていない。したがって置賜の古墳は、この方面のことをさすことになる。その主なものは、時沢古墳群、戸塚山古墳群、梨郷古墳群、安久津古墳群、清水前古墳群、羽山古墳群、鳥居町古墳群、加茂山古墳、石堂山古墳、北目古墳群、源福寺古墳群、亀岡古墳、荷鞍窪古墳、愛宕山古墳、金原古墳などがある。これらの古墳の相当数は、既に発掘され壊されている。最近は羽山古墳のように復元されて保存されているものもあり、保護の手がのびており、遺物も文化財として保存されている。置賜地方の古墳は山腹に設けられたものが多く、大部分が群をなしており、これに用いた石材は高島方面の凝灰岩である。出土品（副葬品）も豊富であり勾玉、剣、鏡、鎌、刀子などがある。これらの出土品と築造位置や形態からみて、置賜方面の古墳築造は、他の地区より遅くまで行われたのであろうといわれている（七世紀末ないし八世紀初頭）。

白鷹町の 古墳時代

置賜地方における古墳の分布で誰でも考えることは、「赤湯・高畠方面にだけあつて、他の地方には一つも発見されていないのはなぜだろうか。」ということであろう。このことについて、『東置賜郡 史上巻』は、

「横の地理的分布は同時に、縦の歴史的過程を示すものと見なければならぬ。然るに、こうした考え方を否定して、地理的分布はあくまでも横のものであり決して歴史的過程を示さないと主張するものがあるけれども、その間違っていることはいうまでもない。」

とのべて、地理的な古墳の分布は当然歴史の過程を示す実証であるとしている。この説に従えば当白鷹町に古墳が存在しないのは、地理的な条件が、中央政權が直接浸透する場所でないので、統治者の影響することが薄く、古墳の築造がなされないのであるということになる。

会津方面や福島・宮城方面に、古くから数多くの古墳が造られそれが奥羽山脈を越えて一つは高畠方面に、一つは上山・山形方面に、それぞれの特色を見せて築造されるようになったのであるが、これが中央権力の浸透度と支配に便利な地域の固定化となつて現れたことが、当地に古墳の形成をみない大きな要因なのであろう。

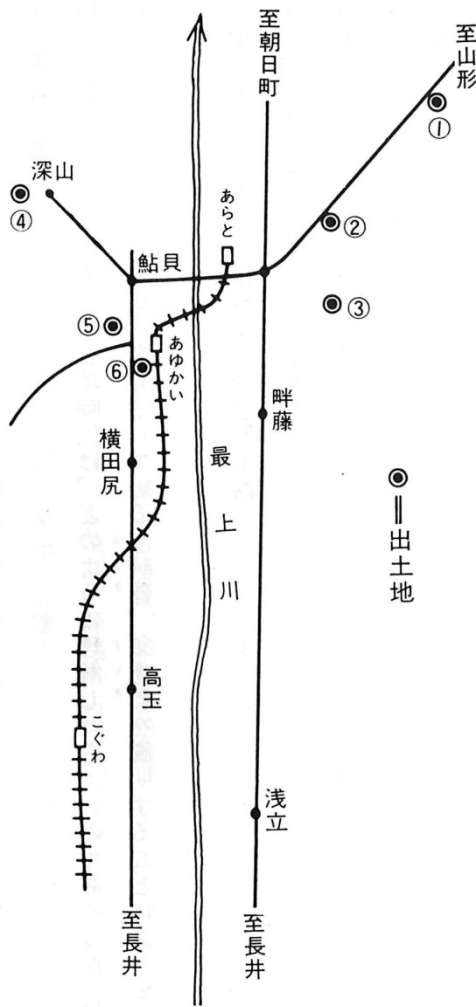
(1) 土師器

古墳が未発見である当白鷹町の古墳時代は、どのように理解したらよいのであろうか。将来古墳が発見されれば別であるが、今のところでは僅かに発見されている土師器^{はじき}、須恵器^{すえき}を説明することによつてこれを補う以外にはないようである。

① 中山、焼野下出土、口縁外反りの壺形土器

・中山小学校蔵（布施誠三郎氏発見）。

第1図：白鷹町内土師器出土地



- ・ 口径 一四・五センチメートル。
- ・ 体横径 一五・五センチメートル。
- ・ 高さ 一六センチメートル。
- ・ 約三分ノ一が、欠損したものを復元してある。

- | | |
|---|--------|
| ① | 中山、焼野下 |
| ② | 十王、大豆田 |
| ③ | 荒砥、貝生 |
| ④ | 深山、西向 |
| ⑤ | 鮎貝、八幡一 |
| ⑥ | 鮎貝、飯詰 |

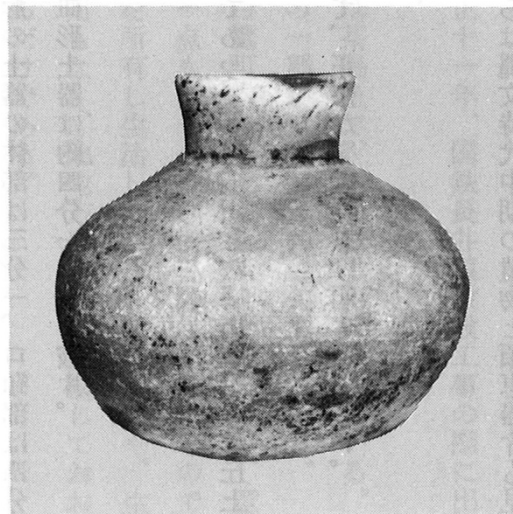
- ・ 色 灰褐色。
 - ・ 乱雑な擦痕があり、特に頸部に著しい。
 - ・ 底部は別個に作り、取り付けたようである。
 - ・ 出土地は県道荒砥―山形線の南側にあつて、道路より約二〇メートルほど上方の傾斜地である。
- ② 十王、大豆田出土 直頸形壺形土器
- ・ 出土地は縄文時代中期・晩期の遺跡に隣接している。

③ 荒砥、貝生出土 口縁外反り壺形土器片

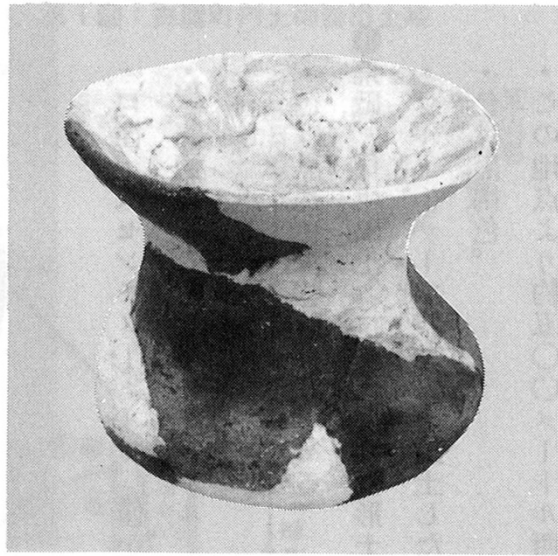
- ・ 口径 八センチメートルで、僅かに欠損しているがほぼ完形。
- ・ 体部横径 一七センチメートル。
- ・ 高さ 一七センチメートル。
- ・ 色は黒褐色で整形良好である。
- ・ ブルドーザーで整地の際出土したものである。
- ・ 色は黒褐色。
- ・ この地点より約五〇〇メートル西方の同じ愛宕山麓（所峽）に須恵器の窯跡がある。



第2図：土師器・中山，焼野下出土
(中山小学校蔵)



第3図：土師器・十王，大豆田出土
(西村正氏蔵)



第4図：土師器（鮎貝，八幡一出土）

・ 荒砥、貝生、岩崎繁氏蔵。

④ 深山、西向出土 口縁外反り壺形土器片

・ 十王、平吹利数氏蔵。

・ 実淵川右岸の段丘上にあつて、館址（チャシか？）と思われる遺跡と縄文時代中期遺跡とが隣接しているところで、口縁部片だけである。

・ 色は黒褐色である。

⑤ 鮎貝、八幡一出土 口縁部外反り壺形土器 小形皿型土器

・ 壺形の土器の体部は三分一、口頸部は四分の三欠損。

・ 小皿形土器は約四分一のみ破片。

・ 共に整形粗雑である。

・ 色は茶褐色。

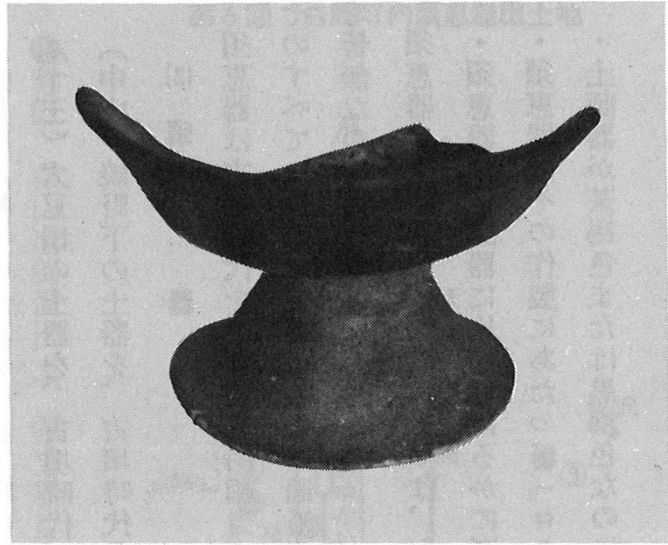
・ 出土地は縄文時代前期・中期・晩期の遺物が出る遺跡であつて、最上川と八幡川の河岸段丘上で、遺跡面積は町内遺跡中最も広い。

・ この土師器二点は晩期土器片と共にあつたものであつて、正確な発掘地点は明らかでない。

⑥ 鮎貝、飯詰出土 高坏

・ 横田尻、金沢寺蔵。

・ 出土地は、最上川河岸段丘の一部と見られ、同地点からは縄文時代中期の遺物と須恵器片も見つかるところで



第5図：土師器・鮎貝，飯詰出土
(金沢寺蔵)

ある。

・大正十一年、国鉄長井線敷設工事の際に出土したものである。

・色は茶褐色で、内面に黒漆がついている。

・体の一部が口縁部と共に欠損している。

以上が白鷹町内に出土した土師器であるが、意図的に発掘されたものは一点もなく、全部偶然発見されたものである。したがって土師器を所有し生活した人々の生活内容や、生活環境を知る材料は外にもなく、他地方のそれと比較しておおよその存在位置を推定するだけである。

そこで白鷹町出土の土師器が、弥生時代から始ったといわれる稲作耕作との関連についてどうであったかを考えてみたい。これ

を考える場合、先に書いたように資料としての遺物が土器の外何もないので、地形的に見てどうだろうか、というところをとりあげる。結論を先にいうならば、発見された場所はいずれも稲作には不適當な場所と見られるのである。中山の焼野下は、傾斜面の中腹であり、荒砥貝生は急斜面の下部になり、十王の大豆田は他地方の稲作遺跡と比べた場合、稲作をとり入れた遺跡と考えるには無理がある。又、最上川左岸にある鮎貝の飯詰、鮎貝の八幡一は両所共に最上川の河岸段丘上にあつて、稲作には無理である。深山の西向は、これまた実淵川の河岸段丘上にあつて稲作とは無縁のようである。

以上のように、出土地点からだけ見るならば稲作耕作とは縁遠い条件なのであって、むしろ縄文時代よりの延長ではないかとも見られるようなところである。しかし、置賜盆地内でも八幡原遺跡や堂森遺跡（いずれも米沢市）からはモミ痕のある土器が発見され、古墳時代以前よりの稲作実施が確認されているのであるから、当地方の土師器出土地点が稲作に適当でないからといって、稲作導入が全くないとは断言できないのではないか。ただ、それを立証する資料が未発見なのであると考えたい。

白鷹町内出土の土師器について、その時代を平吹利数氏は次のように位置づけをしている。

（鮎貝）八幡一の土器を、古墳時代のⅡ期に。

（十王）大豆田の土器を、古墳時代のⅢ期に。

（中山）焼野下の土器を、古墳時代Ⅲ期末に。

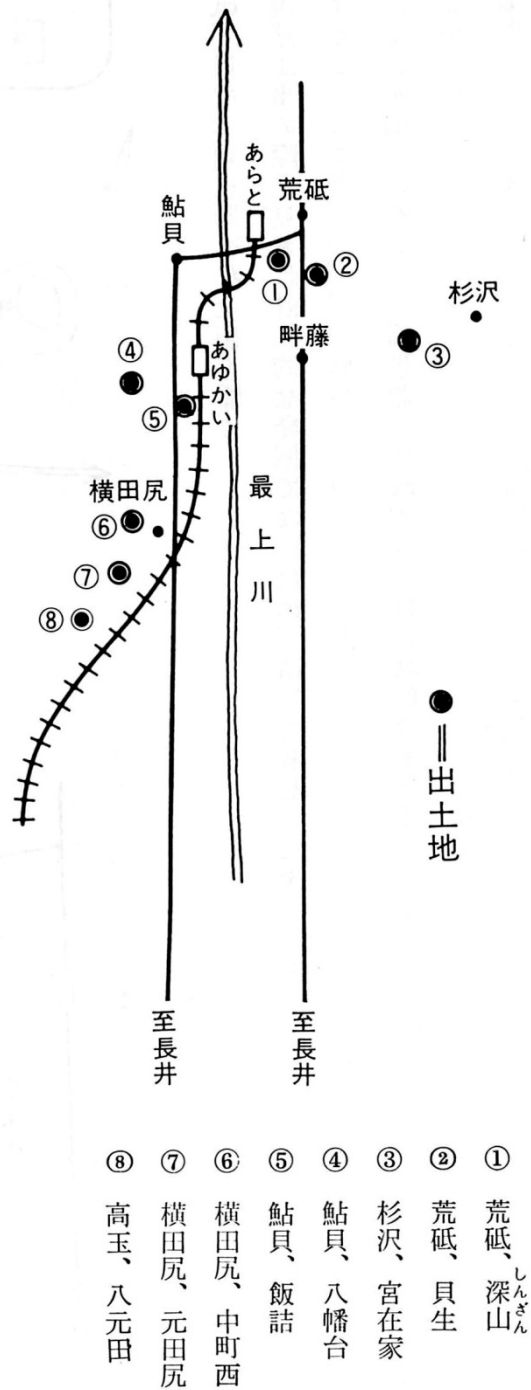
(2) 須恵器

須恵器は古墳時代を過ぎても尚相当の期間使用されたであろうと言われており、古墳時代という時代区分の中で、そのすべてについて述べることは適当でないかもしれないが、出土例が非常に少なく更にまたこの時期の遺物の伴出も皆無なのでここで取り上げる。

須恵器が土師器と区別されるのは、主に次のような点とされている。

- ・ 須恵器は土師器に比べてはるかに高い温度で焼かれているため非常に硬いこと。
- ・ 須恵器はその作製にあたって「ロクロ」を使用しており、整然とした痕跡がある。
- ・ 土師器が茶褐色または黒褐色なのにくらべ、須恵器は、灰色または灰褐色に近いものが多い。

第6図：白鷹町内須恵器出土地

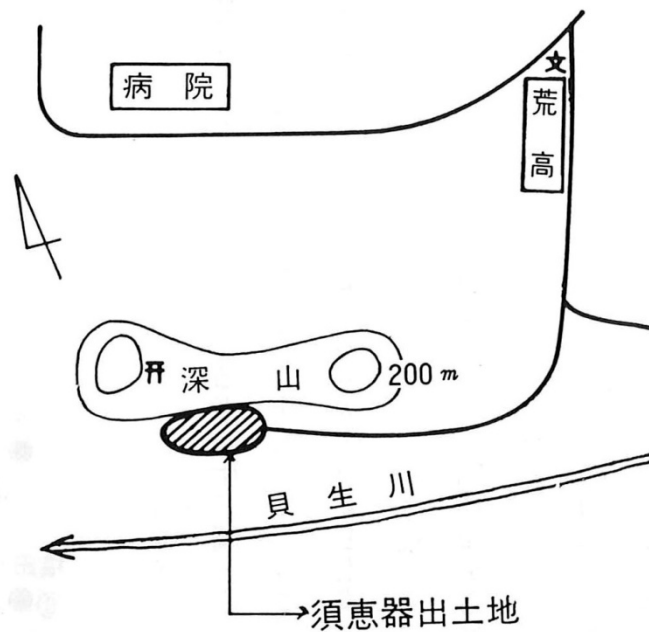


① 荒砥、深山南斜面出土、須恵器片五個

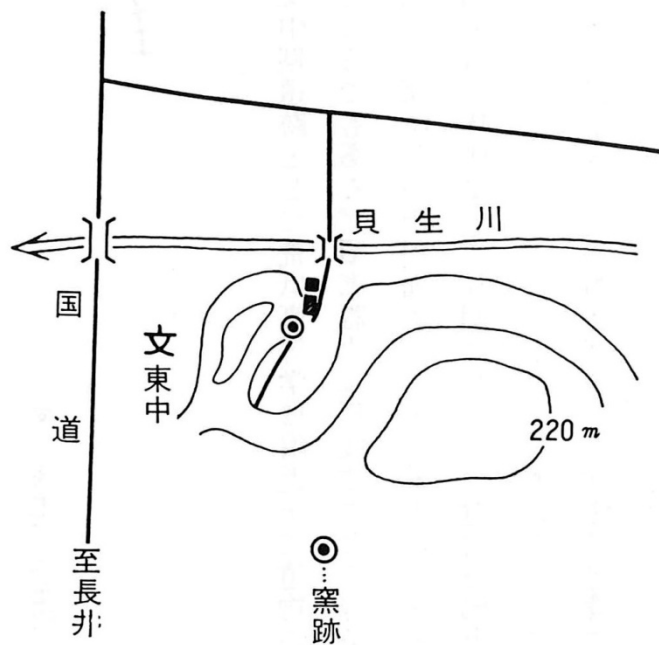
第二次大戦後開墾の際発見されたもので、同地附近は縄文中期遺跡として荒砥高等学校附近まで遺物の出土するところであり、また弥生時代の天王山式土器の出土したところでもある。須恵器片は叩技法による線条式のものが多い部分で、台付の底部一片、灰釉のもの三片がある。同地は深山丘の南斜面で、下方に最上川にそそぐ貝生川が流れており、縄文時代の中期初頭から弥生時代を経て須恵器の時代までの長期にわたって遺物を出土するところとなる。近くには「腰尾神社」があり、また、江戸時代恙虫つがの罹災からのがれるための願いをこめて建てられた「毛谷明神」がある。この漆山南斜面の遺跡は、清水の湧き出るところであったが、町営住宅建設によってほとんど見ることが出来なくなってしまうた

遺物所有・荒砥高橋竹松氏。

第7図：深山遺跡



第8図：貝生須恵器窯趾



② 荒砥、貝生 須恵器窯趾及須恵器片

道路工事の際発見され計画的な発掘でないため、遺物も散乱した後に気付いたもので、確実に「窯あと」と断定することはできないが、地形が「窯づくり」に適していることや窯としての条件が合致していること、木炭屑がたくさん出ていること、須恵器が比較的大割れの状態でまとまって出ていることなどの点からみてほぼ間違いはなからう。

・須恵器片 口縁部四個を含めて二〇個を貝生の工藤浅吉氏が所蔵している。二個は薄手で、全体に灰白色で

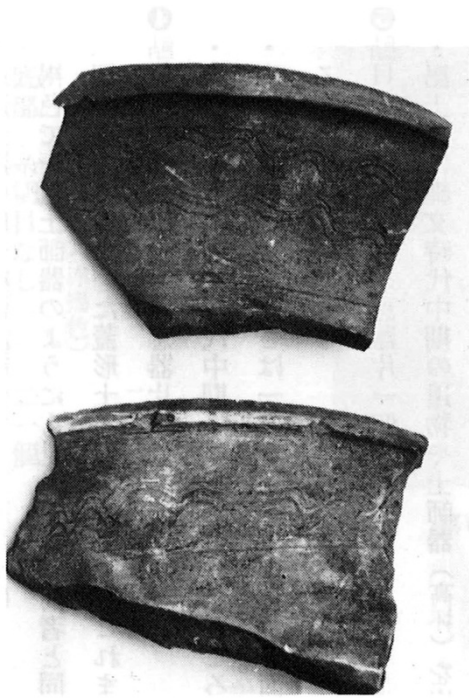
極めて硬質である。

- ・ 器形は正確に推定できないが、出土片より一個は壺形と見られ、他は大形の甕形土器と考えられる。
- ・ 文様は頸部に五本ずつの波状文が付けられ、体部には線條式叩技法による文様が見られる。内部は篋目のついたものがある。
- ・ 厚いもので一・五センチメートル、薄いもので一センチメートルほどである。

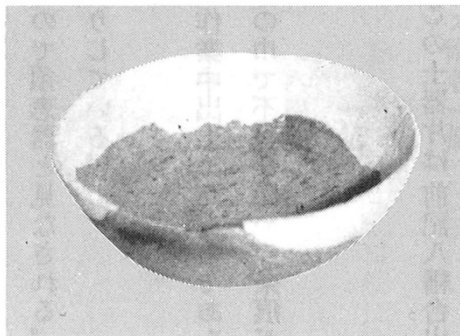
③ 杉沢、宮在家出土 皿形土器二個（一部欠損）

完形小皿一個

・ 田の基盤整備作業の際出土したものであるが、出土地の地形、深さからみて窯趾ではないかと推定される。地形の原形は不明であるが、工事に従事した人の話では地表より約二メートルほど下位である。



第9図：須恵器片（工藤浅吉氏蔵）



第10図：須恵器・杉沢，宮在家出土
（衣袋七郎氏蔵）

・皿形土器の内一枚は灰褐色でロクロ目もはっきりし、底部は糸切り目が明確で硬質である。もう一個の方は茶褐色で一見土師器のようにも見えるが、前者と同一地点からの出土なので須恵器と見なされる。さらにもう一個のツマミのついた蓋形土器は茶褐色で、これまたロクロ目がはっきりしている。

④ 鮎貝、八幡台出土 須恵器片一個

・この出土地は縄文時代中期の遺物が豊富なところで、住宅建築工事の作業中出土したものである。
・硬質の灰褐色で、厚さは一センチメートル。表面は四ミリメートル程の巾で不整な深めの条痕がつけられている。

⑤ 鮎貝、飯詰出土 須恵器片一個

・出土地は縄文時代中期の遺物や土師器（高坏）を出土したところで、この土器片は前記八幡台出土の須恵器片と同質のものである。平吹利数氏所蔵。

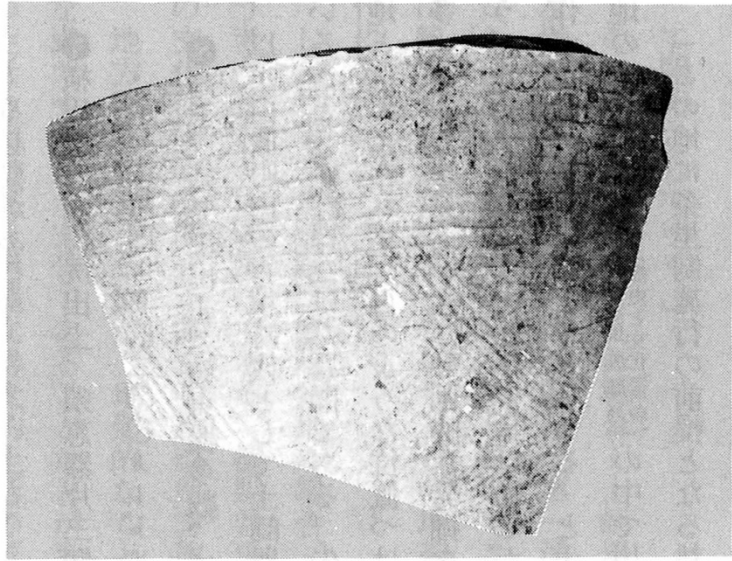
⑥ 横田尻、中町西出土 須恵器片

・この出土地は縄文時代晩期の遺物や土師器とも見られる土器片が採集されるところで、江戸時代末期の水帳（検地帳）には、こしやう原（小塩原）の名で書かれており、最上川の河岸段丘上にある。
・土器片は全部表面採集による。
・質は極めて硬く、前記の八幡台や飯詰出土のものと同質のようである。色は大部分灰褐色である。
・土器片の内訳は次の通りである。

口縁部外反り 二個

皿状 四個

蓋、ツマミ付 二個（内一個は布目痕があつて、灰釉着）
蓋、片 一個
底部 糸切目 二三個
" "（赤褐色） 一個
底部 糸切目なし 二一個



第11図：須恵器片（横田尻中町西出土）

片、無文	六四個	片、無文自然釉	五個	片、外条痕文	一五個	片、内外条痕文	二〇個	片、外条痕文内波状文	二〇個	片、外部縦条痕文	一個	片、内反り（赤褐色）	一個
片、無文	六四個	片、無文自然釉	五個	片、外条痕文	一五個	片、内外条痕文	二〇個	片、外条痕文内波状文	二〇個	片、外部縦条痕文	一個	片、内反り	一四個
片、無文	六四個	片、無文自然釉	五個	片、外条痕文	一五個	片、内外条痕文	二〇個	片、外条痕文内波状文	二〇個	片、外部縦条痕文	一個	片、自然釉（濃褐色）	五個
片、無文	六四個	片、無文自然釉	五個	片、外条痕文	一五個	片、内外条痕文	二〇個	片、外条痕文内波状文	二〇個	片、外部縦条痕文	一個	片、自然釉（白色）	一個
片、無文	六四個	片、無文自然釉	五個	片、外条痕文	一五個	片、内外条痕文	二〇個	片、外条痕文内波状文	二〇個	片、外部縦条痕文	一個	片、直立縁	一個

〃	〃	(灰白色)	二個
〃	〃	刃痕らしきもの	二個
〃	〃	台付	二個
合計			二一一個

・厚さは三ミリメートルから一五ミリメートルまでさまざまである。

・出土地の面積は二〇アールほどのところで、今後も数多く採集のできる可能性がある。将来計画的な発掘をする必要がある。

⑦ 横田尻、元田尻出土 須恵器片三個

・前記中町西より約二〇〇メートル西南方の河岸段丘上で、底部糸切り目片一個、表面黒色片二個のみある。
⑧ 高玉、八元田出土、須恵器多数、地主の話では窯趾らしきものがあったという。

以上白鷹町内の古墳時代として土師器、須恵器の出土例について述べたのであるが、古墳時代を表わすに当を得ているかどうか、はなはだ疑問である。先述した如く、出土地は山丘の傾斜地か又は河岸段丘上にあり、稲作耕作の適地とは考えられず、どのような位置づけをしたらよいのか迷うところである。横田尻、中町西遺跡の面積と、その数多い土器片を見ると、計画的な発掘を行なうならば、必ず住居遺跡としての痕跡が発見されるのではないかと思う。殊に土器片の中なかすかではあるが「モミ痕」を確認できることは、須恵器使用の時代に、この地方において稲作が行われていたことを意味する。とすればその稲作はどこで行なわれたのであろうか。このことについて「山形盆地の古式土師器」〔『最上川流域の歴史と文化』所収〕の中で川崎利夫氏は、次のように述べている。

「この地に条里制施行の前提となる耕地・集落が発達するまでの期間、扇状地先端部は最良の水稻の生産地帯

として開拓されてゆく。」

この条件で白鷹町を見た場合、土師器や須恵器の出土地は生産地として適地であるかどうか。扇状地先端は最上川左岸では県道草岡―八幡線附近が第一湧水地帯にあたり、右岸では各小川が平地部に顔をのぞかせたところ、ということになる。どうも満足な答えが出てこないのである。かつて、最上川兩岸の平地部は降雨の度毎に洪水となり川筋は絶えず変ったであろうから、この地帯での稲作は考えられない。この地域が稲作地帯として開拓されるのは江戸時代に入ってからである。

しかし第一の課題は置賜盆地の場合、赤湯・高畠方面にだけ古代古墳があつて他地方に発見されていない事実をどう考えたらよいのか、である。置賜盆地に於いては、中央政權の浸透北進が高畠・赤湯方面に限定され、当地方はその文化に染まる度合が薄く、且つ地方族長を育てる条件が揃っていなかった、とみる外はないのではなからうか。

地方族長の育つ条件は、地形的なこと、稲作導入に必要な条件が揃っていること、中央文化を受け入れ経済的要件を満たす内容が充分であることなどが考えられる。このように考えてくると、当地方の古代古墳時代というのは、その生活の相当部分が縄文時代的生活の延長線上にあつたのではないか、というような気がしてならない。

なお、古墳時代の土師器・須恵器について『島遺跡発掘調査報告』は次のように述べている。

「土師器は、古墳時代およびその以降において製作され使用された土器である。ほぼ同代の土器である須恵器と区別して土師器と呼んでいるものは、その器形や製作技術からいうと弥生式土器の流れをくむものであり、したがって末期の弥生式土器と初期の土師器とを厳密に区分することは甚だ困難である。東北地方の土師器の上限の年代は、実際上は弥生式土器との間に引かるべき明確な一線というものを確定するのが困難なのである

けれども、常識的にみてこの地方の古墳時代開始の時期とみてよからう。氏家^{〔多賀城址〕}和典氏^{〔研究所〕}によれば、東北地方の土師器の初源は四く五世紀に、そしてその終末は一〇世紀前半になるであろうといわれている。東北最古の古墳は、会津若松市の大塚山古墳である。古墳時代前Ⅰ期すなわち四世紀後半と推定している。弥生時代後期以降、古墳時代前期や中期の文化は、この地方にも急速にかつ確実に伝播し、広く農耕文化が進んでいたことが知られるのである。ただ農耕文化は、表日本と時期的に大差なく波及しているが、その発展段階において総体としての農業生産力の低さが階級分解をおくらせ、政治的結合をルーズなものにし、その組織を未成熟なものにし、古墳を生み出す階級支配の成立をおくらせたものであろうと思われる。確かに古墳の構築自体にみられる様相は、東北北部の古墳文化とも相似た性格をもつものであり、その発展も軌を一にした点が多くあったとしても、山形盆地における古墳時代集落跡における土師器の存在が、単なる遺物そのものの流伝によるものであったとはできない。八世紀における出羽建国に際して、陸奥国から最上・置賜両郡を割いた歴史的事実は、少なくともこの地域が東北南半の発展の過程の中に、正當にくみこまれるべきものであり、たとえ若干の年代的ズレを認め得るにしてもほとんど問題にすべきではないと考えるのである。

須恵器Ⅱ山形盆地および周辺地域で須恵器を出す遺跡は、土師器を出すそれに比して優るとも劣らない。平地部の集落跡の大半は両者が共伴する。この地方で須恵器がはじめて製作使用された年代には、すでに土師器が盛行していた。」

と、述べて当地方における土師器・須恵器の年代想定を示している。